

## 12月14日(日) サムエル記第一14章6, 7節

「さあ、この無割礼の者どもの先陣のところへ渡って行こう。おそらく、主がわれわれに味方してくださるだろう。多くの人によっても、少しの人によっても、主がお救いになるのを妨げるものは何もない。」(6節)

---

無割礼の者どもとは、異邦人であるペリシテ人を侮辱する表現なのですが、それは主なる神に信頼する信仰から出て来たことばです。つまり主は割礼を受けている主の民である自分たちに味方してくださるとの確信が信仰によってヨナタンに与えられたのでしょう。それゆえにヨナタンは、「多くの人によっても、少しの人によっても、主がお救いになるのを妨げるものは何もない。」と言います。ここでヨナタンの言う「少しの人」とは、サウルのもとに残された六百人のことです。最初は、三千人いましたが、それが六百人に減り、三千人でも少ないのに、さらに少なくなってしまったのではどのようにして戦えばいいのだという気持ちに、サウルをはじめイスラエルの民はなっていたことでしょう。しかし、主の救いのみわざは、人数によって左右されるものではありません。状況によって主のみわざが変ることはありません。逆に状況的に不利に思える時にこそ、主はその力を用いて、ご自身の栄光を現してくださいませ。むしろ、状況が有利であったり、物事がうまくいっている時にこそ、私たちは気をつけなければなりません。そのような時に私たちは主に頼るのではなく自分の力や能力に頼ったり、主に頼らなくてもできると思って、油断することがあるからです。

7節で道具持ちは「何でも、お心のままになさってください。さあ、お進みください。私も一緒に参ります。お心のままに」と言います。まさにヨナタンと道具持ちの若者が一つ心になってペリシテの先陣へ向かおうとしています。ヨナタンの信仰が道具持ちの若者を励まし、心一つにしたのでしょう。私たちも一人一人の信仰が、周りの兄弟姉妹の信仰を励まし、一つ心となって前進できる力となるために信仰を増し加えられるように祈りましょう。

## 12月15日(月) サムエル記第一14章8~10節

「しかし、もし彼らが『おれたちのところへ上って来い』と言ったら、上って行こう。主が彼らを、われわれの手に渡されたのだから。これが、われわれへのしるしだ。」(10節)

---

8~10節でヨナタンは、自分たちが姿を現したときに敵がどう応じるかによって合図を決めました。ペリシテ人たちがじっとしていると言ったなら、攻撃をせず立ち止まり、「おれたちのところへ上って来い」と言うなら、上って行くことにしました。敵のそのような反応を、主が示してくださる合図だと信じたのです。そのようにしてヨナタンは慎重に主のみこころを伺おうとしました。私たちも、何か行動を起こす時には、性急に事を行わず、常に主のみこころを伺い、そして主のみこころと確信してから行動を起こすようにすべきです。

ヨナタンは「主が彼らを、われわれの手に渡されたのだから。」(10節)と言います。つまり、勝利は自分たちの兵力や作戦によってもたらされるのではなく、主ご自身が敵を自分たちの手に渡されることによってもたらされると信じていたのです。私たちの信仰の勝利もまた主によって与えられます。実際に、エペソ人への手紙6章10節には「主にあつて、その大能の力によって強められなさい。」とあります。なぜなら、もし私たちが自分の力で悪魔や暗闇の世界の支配者たち、天上にいるもろもろの悪霊と戦おうとすれば、必ず敗北するからです。主にあるな

ら、私たちも戦いにおいて勝利が約束されているのですから、雄々しく信仰の戦いを最後まで戦いましょう。

## 12月16日(火) サムエル記第一14章11～15節

**「そして陣営にも野にも、すべての兵のうちに恐れが起こった。先陣の者、略奪隊さえ恐れおののいた。地は震え、非常な恐れとなった。」(15節)**

11～12節を見ますと、二人は作戦どおりにペリシテ人の先陣に身を現しました。するとペリシテ人は二人のところへ上って来ず、逆に「おれたちのところへ上って来い。思い知らせてやる。」と言いました。まさにこれは10節でヨナタンが語ったとおりの反応でしたので、ヨナタンは主がペリシテを彼らの手に渡されたと確信することができました。13節で、ヨナタンと道具持ちの若者は、手足を使って岩をよじ登り、ペリシテ人を攻撃すると、彼らは油断していたからでしょうか、もしくはまさか上って来るは思わなかったからでしょうか、一ツエメド(一くびきの牛が一日かかって耕す面積)の半分の広さの場所で約20人のペリシテ人を打ち倒しました。これは、二人で戦ったことを考えますと大きな成果と言えます。このことがペリシテの陣営にも野にも伝わり、すべての兵のうちに恐れが起こりました。その恐れがどんなに大きかったかということが、勇猛果敢な先陣の者や略奪隊さえ恐れおののいたことから分かります。その恐れは、「地は震え、非常な恐れとなった」とあります。ここの「非常な恐れ」は、欄外注を見ますと、直訳「神の恐れ」とあります。ですから、神からの恐れとか、神によってなされた混乱なども訳されていますが、この恐れが神によって引き起こされたことは間違いありません。ここでまず信仰をもって敵陣へ攻め込んだヨナタンと道具持ちの若者を神が用いられて、さらに主がペリシテの陣営に恐れを起こされました。神は、いきなり敵陣に恐れを起こさせたわけではなく、ヨナタンと道具持ちの若者を用いられてそのことを通して恐れを引き起こされました。主は、ご自身のみわざのために信仰をもって進みゆく者を用いられます。そのことを信じて私たちも信仰をもって進む者たちでありたいと思わされます。

## 12月17日(水) サムエル記第一14章16～18節

**「神の箱を持って来なさい。」(18節)**

サウルの陣営で見張りをしていた者たちが、ペリシテ人の大軍が恐れて、右往左往し混乱している様子を見ました。サウルは、もしかすると自分が命令を下していないにもかかわらず、誰かペリシテの軍勢に攻撃を加えた者がいるのではないかと思ったのかもしれませんが。「だれがわれわれのところから出て行ったかを、点呼して調べなさい。」(17節)と言います。点呼した結果、ヨナタンと道具持ちがいませんでした。そうしますと、サウルはアヒヤに「神の箱を持って来なさい」と命じます。恐らく、これはアヒヤにこのままペリシテとの戦いに出るべきかどうかを主に問おうとしたのだらうと思われます。ここで私たちが注目すべきことは、神の箱に対するサウルの態度です。神の箱は主の臨在を表すものですが、まるで主をサウルのもとに呼びつけているようにも見えます。つまり、サウルはもっと敬虔な態度で主の箱を扱うべきだということです。私たちも、祈りや礼拝時に主の御前に出ます。その時に私たちはどのような態度で主の御前に出ているでしょうか。何も考えずに主の御前に出ていることはないでしょうか。

主の御前にへりくだって、主への恐れをもって私たちは主の御前に出ているのでしょうか。本来私たちは主の御前に出ることは許されない罪人ですが、主の恵みとあわれみによって主の御前に出ることが許されているにすぎないことを自覚しなければなりません。主なる神は、人の手で造られた命のない偶像ではありません。主は人格を持つ生ける神です。その方の御前に出ることを自覚しているのでしょうか。

## 12月18日(木) サムエル記第一14章19～23節 「サウルは祭司に「手を戻しなさい」と言った。」(19節)

昨日は、「神の箱を持って来なさい」との命令を通して神の箱に対するサウルの態度を見てまいりましたが、今日は「手を戻しなさい」との命令を通して主なる神に対するサウルの態度を見てまいりたいと思います。

神の箱を持って来させることで、サウルは祭司アヒヤを通して主の導きを求めようとしたのでしょうか。しかし、サウルは「手を戻しなさい」と言って、それをやめさせたのです。ここに二つのサウルの問題を見ることができます。まず一つ目が、本来祭司アヒヤが権威をもってなすべきことをサウルは王の権威をもってやめさせたということです。これは、明らかなサウルの越権行為であり、祭司の働きを蔑んだ行為です。それと同時に、「手を戻しなさい」ということは、主のみこころを伺うことを中断したということです。つまり、ペリシテ軍へ向かって攻めて行くべきか、とどまるべきかなど、自分はここでどうすべきかを主に聞かないで自分の判断で行動することを決断したということです。私たちは、いかがでしょうか。主に聞かないであわてて行動したり、決断することはないでしょうか。主にみこころを伺おうとしたにもかかわらず途中でやめて、自分の考えで事を進めたことはないでしょうか。主は必ず祈りに答えて私たちに行くべき道を教え、なすべきことを教えてください。大切な決断をしなければならない時には主に祈りましょう。

20節でサウルと彼とともにいた兵が戦場へ行ってみると、陣営の騒動はますます大きくなっていて、敵か味方かも分からなくなり同士討ちを始めるほどでした。21節の「ペリシテについて、彼らと一緒に陣営に上って来ていたヘブル人」とは、恐らくペリシテに投降して捕虜になったり、捕えられた人たちではないかと思われそうですし、22節ではエフライムの山地に隠れていた者たちも加勢してペリシテ人を攻撃して勝利を取めました。「その日、主はイスラエルを救われた」(23節)とありますが、6節でヨナタンが信じたとおりに主はイスラエルを救われました。まさに主は信じる者の信仰に豊かに答えてくださるお方です。私たちもどんな中でも主を信じましょう。

## 12月19日(金) サムエル記第一14章24～26節

「さて、その日、イスラエル人はひどく苦しんでいた。サウルは、『夕方、私が敵に復讐するまで、食物を食べる者はのろわれよ』と言って、兵たちに誓わせていた。それで兵たちはだれも食物を口にしていなかったのであった。」(24節)

23節に「そして、戦いはベテ・アベンに移った」とありますが、サウルはペリシテ軍をさらに追撃しようとしたのでしょうか。その中で食物を食べないように兵に命じ、「食物を食べる者は

のろわれよ」とまで言いました。それが、神の御前で意味あることだと考えたのかもしれませんが、食物を食べなければ、主はさらに自分たちを助けてくれると思ったのかもしれませんが。そのことを通して神に真心を示すことで、神の救いと勝利を得ようとした可能性もあります。しかし、食べ物を口にしないことで兵たちの力が出ないことを考えれば、サウルは何と愚かなことをさせたのだろうかと思ってしまう。ここで私たちが考えるべきことは、主がイスラエルを救われたのは、ヨナタンの信仰に主が答えてくださったことと、まさに一方的な主の恵みであったということです。

私たちは、信仰生活の中で主と取引をしようとするのではないのでしょうか。自分が何かをすることにより自分の犯した罪を大目に見てもらおうとか、さらなる祝福を受けようとか考えるのではないのでしょうか。自分の立場を考えれば、サウルのように主と取引をしようとするのは、いかに愚かなことであるかが分かるはずです。また恵みは主のみこころにより一方的に与えられるものですから、私たちはただそれを感謝をして受け、ただ主のみことばに従って歩むのが、私たちの信仰生活です。それとともに、食物を口にしないようにさせたのは主のみこころでも何でもなく、ただのサウルの考えでした。それを兵にまで押し付けたのです。教会の中にも、主のみこころを求めることなく、自分の考えを周りに押しつける人がいますが、それによってどれだけ多くの人が悩まされたり、苦しんだり、負わなくてもいい重荷を負わされることもあるということを考えなければなりません。

## 12月20日(土) サムエル期第一14章27~30節

**「もしも今日、兵たちが、自分たちが見つけた敵からの分捕り物を十分食べていたら、今ごろは、もっと多くのペリシテ人を討ち取っていただろうに。」(30節)**

---

父親サウルとは別行動で戦っていたヨナタンは、当然ながら24節で語られていたサウルのことばや誓いも知りませんでした。それで、手にあった杖の先を伸ばして、蜜蜂の巣に浸し、それを手に付けて口に入れました。「すると彼の目が輝き」ました。恐らく、これは戦いで疲れ切って、空腹であったヨナタンが元気を回復したことを意味しているのでしょうか。それを見た兵の一人が、ヨナタンにサウルの断食命令と誓いを話します。それを聞いたヨナタンは、兵たちが分捕り物からでも十分に食べていたら、今ごろは、もっと多くのペリシテ人を討ち取っていただろうにと言います。(30節) ある意味、サウルの意味のない誓いのために追撃が中途半端に終わったことを嘆いているのです。それはサウルの主のみこころを求めない命令の結果でした。

昨日も見ましたが、もし教会の中にも主のみこころを求めず、神の主権を認めないで、自分勝手に振舞おうとする人がいれば、それは教会員を疲れさせ、一致を破壊し、主の御名による前進を妨げることとなります。教会がそのようになっていくことを一番喜んでいるのはサタンです。その中であって主のみこころを求めるように、またみこころにかなわないことを修正するように信仰をもって指摘する人が必要とされています。一人ひとりが、そのような器になれるように祈りましょう。主の教会を破壊する者ではなく、主の教会に祝福をもたらす者とさせていただきます。